

異人論で読み解くヴァンパイア

——『ヴルラのヴァンパイア (The Vampire of Vourla)』とポリドリ『ヴァンパイア』の比較から——

立命館大学嘱託講師 森口 大地

0. はじめに

▶発表概要：以前、世界文学会関西支部での発表と、それをもとにした論文で、佐藤亜紀『吸血鬼』(2016)におけるヴァンパイアの「よそ者」性と共同体の秩序形成に触れた。ヴァンパイアはそもそも「我々」と異なる存在であり、研究上では、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ (Dracula)』(1897)などの有名な文学テキストを対象に「他者性／異質性 (otherness)」が論じられることは多い。しかし、一口に「他者性／異質性」といっても、それは多様なはずであるし、『ドラキュラ』以外にも数多のヴァンパイアを扱ったテキストが存在する。また、ヴァンパイアだけが「他者性／異質性」を帯びるとは限らない。本発表では、こうした問題意識に基づき、以下のテキストにおける「他者性／異質性」を「異人論」を手がかりに、新たにとらえ直すことを目的とする。

▶扱う作品：共にオリエントを舞台とする二作品

ジョン・ポリドリ『ヴァンパイア (The Vampyre)』(1819) ロンドン、ギリシャが舞台

作者不詳『ヴルラのヴァンパイア』(1845?) スミルナが舞台

▶ヴァンパイアとは：生者から血を吸う蘇った死体で、東欧・南欧の民間伝承に伝わる怪物の一種。18世紀前半の神聖ローマ帝国領セルビアで起きた事件をきっかけに西欧にも広まり、後に文学に流入する。現在のイメージの原形は、英国ロマン主義詩人ジョージ・ゴードン・バイロン作とされた、ポリドリの『ヴァンパイア』に始まる。

1. 異人論

▶概要

○「異人旋風」(山 2015)

山口昌男の「中心と周縁」論が起爆剤となり、栗本慎一郎(商人としての異人)、上野千鶴子(野生の権力理論)、今村仁司(第三項排除)など、社会学や経済人類学等、様々な分野に波及する。異人論の嚆矢とされる岡正雄をはじめ、柳田國男の山人論や折口信夫のまれびと論なども再び注目される。

→ただし、「異人」を題に冠した書籍は少ない(小松和彦『異人論』(1995)、赤坂憲雄『異人論序説』(1992))

→海外の古典ではゲオルク・ジンメル(1908)やアルフレート・シュッツ(1944)などが有名

○山口昌男の「中心と周縁」論(山口 2003)

人間は自らを中心として作った同心円によって、「内」と「外」を区別する

社会は中心と周縁が互いに関わりあって成り立っている

中心と周縁は入れ替わりうる(中心が周縁的位置を占めうる、その逆もまた可)

▶異人論さまざま

○小松和彦(山 2015、小松 1995)と赤坂憲雄による異人の類型(赤坂 1992)

小松：異人とは特定の集団の外部にいる者

①共同体に一時的に立ち寄るが、用事がすむと立ち去る。(遍歴の宗教者、職人、商人、乞食、観光者、巡礼者 etc.)

- ②外部から共同体にやってきて定着する。(奴隷、難民、逃亡してきた犯罪者、定着した商人 etc.)
 - ③共同体が内部で特定の構成員を差別・排除した結果生まれる。(内部に留まる場合と追放される場合がある)
 - ④空間的に遠い場所にいて間接的にしか知らない。(鎖国時代の日本から見た外国 etc.)
- ただし、便宜的なもので、実際の異人は、これらの類型が移行したり複合したりする

赤坂：異人とは「実態概念」ではなく「関係概念」(他者との関係のなかで生まれる)

- ①一時的に交渉を持つ漂白民(サンカ、遊牧民、浮浪民、遊行聖、遍歴職人 etc.)
- ②定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる来訪者(行商人、旅人、巡礼、赴任先の学校教師、海外派遣 etc.)
- ③永続的な定着を志向する移住者(移民、亡命者、婚入者、嫁、養子 etc.)
- ④秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン(狂人、精神病患者、犯罪者、アウトサイダー etc.)
- ⑤外なる世界からの帰郷者(帰国する長期海外滞在者、出稼ぎ者、復員兵 etc.)
- ⑥境外の民としてのバルバロス(未開人、エゾ、アイヌ etc.)

○徳田剛による「よそ者／ストレンジャー」の類型

- ▶「よそ者／ストレンジャー」は三つの要素と共通基盤の組み合わせ
 - 三つの要素の混合：「異郷性(よそ者)」、「匿名性(見知らぬ者)」、「周縁性(排除されたマイノリティ)」
 - 共通基盤：「異質性(何か普通ではない、違和感を覚えさせるもの)」
- ▶日本語「よそ者」「異郷人」「異人」、独語「der Fremde」、英語「stranger」の使用語や訳語の問題
 - 空間的移動を含む見知らぬ者＝よそ者
 - ⇔ 非空間的要因を持つ空間的文脈に限定されない見知らぬ者＝ストレンジャー(ストレンジャーのほうが幅広い)
 - 異郷人≡よそ者(stranger や der Fremde の訳語)
 - 異人＝民俗学や人類学の分野、記号論的 ⇔ よそ者＝社会学の分野、社会の構成員

※ジンメルやシュッツの時代の研究での「ストレンジャー」は「よそ者」と重なる部分が多かった

ジンメル：der Fremde とは集団そのものの要素(浜 2015、ジンメル 1999)

「潜在的放浪者」(退去がありうる)「近さと遠さの統一」「客観性と信用」(徳田 2020)

シュッツ：自分の接近する集団に永久的に受容されようとするか、少なくとも容認されようとする者(徳田 2020)

集団が当たり前とみなすことを疑問視せざるをえない 歴史を持たない者

→いずれも定住社会における「よそ者(der Fremde, stranger)」という文脈

2. オリエント的文脈から見たヴァンパイア

▶史料テキスト

- ①ジョゼフ・ピトン・ド・トゥルヌフォールのミュコノス島事件(1700/01)報告(1717)
 - 死んだ男が「ヴルコラカス(Vroucolacas)」となって人々を襲ったと主張する現地人
- ②セルビアのメドヴェギアで起きた事件(1731/32)

【引用1】トルコとの繋がり

[...] アルノント・パウレ(Armont Paule)が干草の荷馬車から落ちて首を折った。彼はしばしば生前に、トルコ領セルビアのコッソヴァ(Cossowa)でヴァンパイアに悩まされており、そうした災厄から解放されるために、そのヴァ

ンパイアの墓土を食べて血を体に塗ったと話していた。(Hamberger 1992, S. 49f.)

③ヴァンパイアとギリシャの関係に言及する事典類 (森口 2022)

ヨハン・ハインリヒ・ツェードラー『万物百科大事典 (Grosses vollständiges Universal-Lexikon)』

ヨハン・クリストフ・アーデルング『高地ドイツ語話法文法的・批判的辞典 (Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart)』

▶文学テキスト

①ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『コリントの花嫁 (Die Braut von Korinth)』(1797)

アテネの若者がコリントに住む許嫁のもとを訪れる

②ロバート・サウジー『殲滅者タラバ (Thalaba the Destroyer)』(1801) の註

トゥルヌフォールの報告に言及

③ジョージ・ゴードン・バイロン『異教徒 (The Giaour)』(1813) の註

【引用 2】レヴァントとの繋がり

ヴァンパイアの迷信は、いまだにレヴァント〔地中海東部沿岸の地域〕で一般的である。信頼できるトゥルヌフォールは長い話を伝えており、サウジー氏は『タラバ』の注でこうした「ヴルコロカス (Vroucolochas)」とトゥルヌフォールが呼ぶ者について引用している。現代ギリシャの (The Romaic) 言葉では「ヴァルドゥラカ (Vardoulacha)」である。私は、ある一家全員が、子供の叫び声に恐怖したことを思い出す。彼らは、そのような者がやってきたせいで、子供が叫んだに違いないと想像したのだ。ギリシャ人は恐怖なしにその単語を口にすることは絶対にない。(Byron, p. 72)

④バイロンの侍医、ポリドリ『ヴァンパイア』(1819)

謎の貴族ルスヴン卿と大陸を旅する青年オーブリの物語。ギリシャに立ち寄る。

本作の下敷きとなったバイロンの未完の「断章 (A Fragment of a Novel)」(1816) はトルコの遺跡に立ち寄る

【引用 3】『ヴァンパイア』の前書き

この物語が依拠している迷信は東洋では極めて一般的である。アラブ人たちの間では、それはよく知られているようである。しかし、キリスト教の確立までは、この迷信はギリシャ人にまでは広まらなかった。ただ、ローマ・カトリック教会とギリシャ正教会への分離以来に現在の姿をとるようになったと仮定される。この時から、ギリシャ正教の領地に埋められるとローマ・カトリック教徒の死体は腐敗しないという考えが流布し始め、次第に数を増やしていった。それは、多くの今もまだ現存する不可思議な話の主題を形成した。つまり、若く美しい者の血で自らを養い、墓から蘇る死者である。それは西洋でいくらか変更されて広がり、ハンガリー全土、ポーランド、オーストリア、ロレーヌにおいて、以下のような信仰が存在した。すなわち、ヴァンパイアは夜に犠牲者の血を一定量摂取するが、そうした犠牲者は消耗し、力を失い、衰弱のために速やかに死亡する。一方でそうした人間を吸血する者たちは肥え太る — そして、その血管は血で満ちて膨張し、その体のあらゆる通り道から、皮膚の毛穴からさえも血を流出させる。

(Polidori, p. 240f.)

⑤プロスペル・メリメ『グズラ (La Guzla)』(1827)

イリリア地方の民謡という体裁で書かれた

⇒多くのテキストは、西洋中心主義的に、「我々」がヴァンパイアを信じる「彼ら」と違うことを主張する (Moriguchi 2023)

⇒ヴァンパイアとオリエン特 (ギリシャに限らない) の繋がりとは当時よく見られた (森口 2022)

Cf. Philhellenism の時代 (バイロンのギリシャ愛など) (García Marín 2024)

3. 文学上のヴァンパイアの「他者性／異質性」——『ヴルラのヴァンパイア』を中心に

▶概要『ヴルラのヴァンパイア、地中海航海記録 (The Vampire of Vourla. Leaves from a Mediterranean Log)』

○あらすじ

シチリアに向かう船内、「法律家 (Lawyer)」とあだ名されるトム・ガーン Tom Gahan は、仲間たちにせがまれ、かつて自分が仕えていたソマーズ氏 Mr. Somers (ソマーズ中尉 Lieutenant Somers) の物語を嫌々語る。トムはもともと法律事務所で働いていたが、酒で破滅し、職を転々とした後、王立海兵隊に入隊、兵卒 private となった。彼がソマーズの部下になったのは、入隊四年後、現在から六年ほど前のことだった。ソマーズは非常な美男子で、年は 22 歳ほど。ともに東方に派遣され、スミルナ湾にあるヴルラという港に六週間ほど停泊した。スミルナを気に入ったソマーズはたびたび出かけ、ギリシャ語を解したので、現地の女性たちと仲良くしていた。しかし、三週間ほどして、トムはソマーズの様子が変わったことに気づいた。かつては生き生きとしていたのに、食欲がなく、黙しがちになり、外出もしなくなった。ただ、真夜中に小舟が彼を迎えにやってきて、それには乗っていくのだった。ソマーズは死人のように青白くなっていき、トムは真相を知るために探りを入れた。彼は、ソマーズが友人のハーディ中尉と話をしているところを盗み聞きする。ソマーズが言うには、ある日、射撃に出かけた際に嵐に遭い、近くの屋敷に避難した。そこには非常に美しいギリシャ人女性おり、ソマーズは彼女に夢中になった。ヘイラ Heira と名乗る女性は、民族の古い風習だとして、互いの血を混ぜる。そして二人は毎晩、逢瀬を重ねるようになる。ハーディの忠告にも聞く耳を持たず、この密会のために衰弱したソマーズはついに錯乱する。鎮静剤を飲ませ、ある晩にトムが見張りをしていると、巨大なこうもりがやってくる。彼は追い払うが、翌日にはソマーズは亡くなっており、遺体の右耳の下には赤いあざのようなものがあつた。トムが話を終えると、仲間たちは眠ってしまっていて、いつの間にかやってきていた太鼓手のみしか話を聞いておらず、怒ったトムは彼に怒鳴るのであった。

▶分析対象

○作中のヴァンパイア像

【引用 4】美しいギリシャ人女性ヘイラ

「…」我が主人〔ソマーズ〕は、これほどまでに美しい被造物など見たことがなかったとおっしゃっていた。彼女は、女性らしい魅力の成熟したギリシャ人らしかった。その髪は肩の下まで長く優雅にカールし、紫色の絹房つきの、金で刺繍された赤い縁なし帽子が頭部を飾っていた。そのはしばみ色の目は深く輝いており、ソマーズ氏曰く、自分の魂の奥深くを覗きこまれているかのように感じたということだった。(p. 70)

【引用 5】ソマーズに愛の言葉を囁かれたヘイラの反応 血を混ぜる

「…」彼女は腕を私〔ソマーズ〕に回し、声を震わせて言った。「貴方を信じてよろしいのかしら？」彼女は私の耳に囁いた。「貴方の生命の血にかけて誓っていただけますの？ 貴方の血を私のそれと混ぜてくださるの？ 貴方は私と、衆生変わらぬ貞節を契ってくださるというの？」(p. 71)

「…」私は腕をさし出した。「…」私は血管から血が滴り落ちるのを感じていた——それは水晶のボウルに落ちた。これ以上は説明できないんだ。この後に起こったことには確信を持ってない。いくらか記憶が混乱しているが、彼女の腕が刺された時には、血が流れていなかったこと、彼女が「永遠に！」と私たちの結びつきを誓った時、彼女の唇がルビーよりも深い色合いを帯びたのを見て、慄いたことは覚えている——しかし、あれは全て夢だったのだと思う。(pp. 71f.)

【引用 6】錯乱したソマーズの叫び

「…」一度、彼は突然、苦痛の叫びをあげた。「そこだ！ そこにいる！ 殺さないでくれ！ 怪物め！ どける、その唇をどける！ 私の血で真っ赤になっている。これが、これが私に対する君の愛なのか？」(p. 76)

【引用 7】トムが見たこうもり

「…」我が主人は身動きせずに簡易ベッドに横たわっていた。目を大きく見開き、巨大なこうもりの恐ろしい姿に釘づけにして。そいつは、ジャワ島で私が見たのとはほぼ同じくらいの大きさだったが——当地では、そいつらはヴァンパイア (Vampires) と呼ばれていた——やつの頭部ときたら！ 人間、というよりむしろ悪魔の顔つきを、その小さく輝く目、すばやく動く顎に見たと思ったくらいだった。その顎は、我が主人の首に押しつけられ、沈みゆくその体から生命の血を吸って、吸って、吸い出していた。やつは吸う時に、漆黒の革の翼をはためかせており、どうやら私は叫び声をあげたに違いなかった。(p. 77)

→スミルナという外部と紐づけられるヴァンパイア オリエンタという舞台

→こうもり=非人間としてのヴァンパイア

cf. 動物としてのドラキュラの「他者性／異質性」(Fukuhara 2017)

cf. こうもりが死体を越えると死体がヴァンパイアとなるというルーマニアの伝承 (バーバー、78 頁)

→犠牲者(吸われる側、ソマーズ)がヴァンパイア(吸う側、ヘイラ)にアプローチする

cf. 『コリントの花嫁』も若者から花嫁にアプローチ

○「異人」は誰か？

ソマーズ：西洋人。スミルナの人間からすれば「異人」(小松の①、赤坂の② あるいは定住も望む？)

→徳田の分類にしたがうなら、「よそ者」(場所の移動に関わる)であり、「異郷性」が強い

ヘイラ：おそらくヴァンパイア(非人間)であり、ソマーズからすると異国の女性(「ギリシャ人 (Greek)」)

→ しかし、スミルナにおいては、彼女は現地人

→ ただし、現地人と交流があるかは不明(この意味では彼女も「異人」たりうる)

【引用 8】誰もいない屋敷(『ドラキュラ』的)

「…」ヘイラが屋敷をすべて取り仕切っているようだった。彼〔ソマーズ〕が着くと、常に豪華な食事が用意されていた。しかし、お付きの者の姿は一切見えなかった。(p. 74)

▶ポリドリの『ヴァンパイア』との比較

○『ヴァンパイア』あらすじ

ロンドンにルスヴン卿という謎めいた貴族が現れ、世間知らずのオーブリ青年は彼の大陸旅行に付き添う。

ギリシャでルスヴンは死ぬが、ロンドンに戻ったオーブリは彼が生きて妹の婚約者になっているのを目撃する。

○ルスヴン卿

ロンドンに唐突に現れ、社交界に入る(外部からの侵入者、小松の①や赤坂の①的「異人」)

【引用 9】ルスヴン卿の描写

ロンドンの冬につきものの放蕩のさなか、流行の先端にいる者たちが催すありとあらゆる宴会に一人の貴族が現れた。

彼は、その身分よりも、その特異性(singularities)のために人目を引いていた。(Polidori, p. 3)

→ロンドンという都会が舞台であり、徳田の言う「よそ者」としては「異郷性」の他に「匿名性」も強い

○ジンメル都市論（「冷淡さ」と「無関心」）（徳田 2020）

人々の移動の多さ、転入・転出の多さにより定住者によるホスト社会が成立しづらい

→「見知らぬ人を見知らぬままに留めておく」

ホスト社会：見る側と見られる側の立場の非対称性 ⇔ 都市社会：相互無関心による立場の対称性

○ギリシャとロンドン

▶ギリシャ

イアンテの「無垢さ（innocence）」（Polidori, p. 10）に惹かれるオーブリ ピクチャレスクの光景の賛美

→ギリシャ＝無垢、美というオリエンタリズムの発露

オーブリ＝「異人」（小松の①、赤坂の②） ソマーズと同じ立場

→ホスト社会との明確な区別

▶ロンドン

死後に蘇り別名でロンドンに現れるルスヴン オーブリの妹の婚約者になるルスヴン

→都市社会的な相互無関心（正体がばれない）

⇒都市的な「よそ者」（ロンドンに現れるルスヴン）とホスト社会的な「よそ者」（ギリシャを訪れるオーブリ）

4. おわりに

▶まとめ

ヴァンパイアが西洋に知られるきっかけとなったのは、セルビアの事件（1725, 1731/32）だが、18~19 世紀初頭の文学・史料テキストにおいてはギリシャと結びつけられることも多かった。ヴァンパイアという、未知の土地の未知なる信仰に対して、①恐怖・困惑と②異国趣味からくる憧れという二つの感情のもと、西洋はヴァンパイアをテキスト上に作りあげていった。①の場合、小松の③④、赤坂の④⑥的な「異人」として、ヴァンパイアが表象されるケースが多い。例えば、セルビア事件では、西洋知識人はヴァンパイアをセルビアの無知蒙昧な現地人による迷信とみなし、徹底的に論駁した。佐藤亜紀『吸血鬼』は、この史実を参照し、共同体内部から作られた「異人」（小松の③）としてヴァンパイアを描いた。一方で、文学においては、②のケースも散見される（ゲーテ、『ヴルラ』、ポリドリ）。②がある程度流行していたことは、メリメが「西暦 1827 年頃、我々が首までどっぷり浸かっていた地方色をからかう」（Gibson, pp. 123f.）と『グズラ』の執筆意図を表明していることからわかる。

⇒ヴァンパイアの「他者性／異質性（otherness）」は、一枚岩ではなく、ネガティブな側面にのみ回収されるわけではない
また、「他者性／異質性」はヴァンパイア以外の登場人物にも付与される

○今後の課題

- ・ 19 世紀初頭の Philhellenism と Orientalism
- ・ 二重の語り（ハーディに語るソマーズの語りを語るトム）による事実の曖昧性
- ・ こうもりに噛まれたソマーズの「狂犬病（rabies）」？
- ・ 「血を吸う巨大こうもり」の神話（García Marín 2024）
- ・ セルビア事件の示唆？ ソマーズの遺体の右耳の下にある傷とセルビア事件の報告書にある遺体の傷の一致（ibid.）
- ・ 「船」と「海」というモチーフ。「こちら側」（山口の言う「内」）を「あちら側」（「外」）と繋ぐもの

▶参考文献

○一次文献

- ▶Anonymous: The Vampire of Vourla. In: The Chaplet. An Elegant Literary Miscellany with Twenty-five Highly Finished Engravings on Steel from the Most Eminent Artists. London 1845?, pp. 60–78.
- ▶Byron, George Gordon: The Giaour. A Fragment of a Turkish Tale. Seventh Edition, with some Addition. London 1813.
- ▶Bericht des Regimentsfeldschers Flückinger an die Belgrader Oberkommandantur (26. 1. 1732). In: Klaus Hamberger: Mortuus non mordet. Kommentierte Dokumentation zum Vampirismus 1689–1791. Wien 1992, S. 49–54.
- ▶Polidori, John: The Vampyre. In: Chris Baldick / Robert Morrison (eds.): The Vampyre and Other Tales of the Macabre. Oxford 2008 [1997], pp. 3–23.

○二次文献

- ▶Dodd, Kevin: “Blood Suckers Most Cruel:” The Vampire and the Bat In and Before Dracula. In: Athens Journal of Humanities and Arts. Vol. 6, Issue 2. April 2019, pp. 107–132.
- ▶Fukuhara Shumpei: Otherness and Animality in Bram Stoker’s Dracula: Zoo, Hunting, and Rabies. 『福岡大学研究部論集 A : 人文科学編』 16 号 (2017)、87~95 頁所収
- ▶Gelder, Ken: Reading the Vampire. London 1994.
- ▶García Marín, Álvaro: The Significance of “The Vampire of Vourla” to Nineteenth-Century Vampire Fiction. In: Journal of Vampire Studies. Vol. 3 (2023), pp. 46–83.
- ▶Gibson, Matthew: Dracula and the Eastern Question. British and French Vampire Narratives of the Nineteenth-Century Near East. Houndmills / Basingstroke / Hampshire 2006.
- ▶Hamberger, Klaus: Mortuus non mordet. Kommentierte Dokumentation zum Vampirismus 1689–1791. Wien 1992.
- ▶Hogg, Anthony: Publication Date of “The Vampire of Vourla”. In: Journal of Vampire Studies. Vol. 3 (2023), pp. 90–99.
- ▶Melton, J. Gordon: The Vampire Book. The Encyclopedia of the Undead. Third Edition. Detroit 2011, pp. 50–52, art. “Bats, Vampire”.
- ▶Moriguchi Daichi: Das Vampirphänomen als subtext und seine ‚Rationalisierung‘ – Die ‚aufklärerische‘ Attitüde der Vampir-Diskurse des 18. und 19. Jahrhunderts. 『ドイツ文学 Neue Beiträge zur Germanistik. Band 21/Heft1 2022』 165 号 (2023)、31-55 頁所収.
- ▶赤坂憲雄『異人論序説』筑摩書房 1997 年〔1992 年初版〕
- ▶小松和彦『異人論』筑摩書房 1995 年
- ▶ジンメル、ゲオルク「よそ者についての補論」:『ジンメル・コレクション』(北川東子編訳／鈴木直訳) 筑摩書房 1999 年、247~259 頁所収。
- ▶徳田剛『よそ者／ストレンジャーの社会学』晃洋書房 2021 年〔2020 年初版〕
- ▶バーバー、ポール『ヴァンパイアと屍体』(野村美紀子訳) 工作舎 1991 年
- ▶平賀英一郎『吸血鬼伝承「生ける死体」の民俗学』中央公論新社 2000 年
- ▶森口大地「ヴァンパイアの定義にまつわる問題の解決の試み」『KG ゲルマニスティク』23・24・25 合併号 (2022)、86~110 頁所収
- ▶森口大地「〈内〉と〈外〉で読み解くヴァンパイア文学——ポリドリ『ヴァンパイア』とストーリー『ドラキュラ』を中心に——」2023 年 10 月執筆 出版待ち
- ▶山泰幸／小松和彦編著『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』ミネルヴァ書房 2015 年
- ▶山口昌男「文化と両義性」:『山口昌男著作集 五』(今福龍太編) 筑摩書房 2003 年、3~222 頁所収